

新たな幼児教育の創出に向けて、幼稚園教育の成果を問う試み

—幼稚園の3歳児保育の内容に着目して—

横山真貴子

(奈良教育大学 幼年教育教室)

竹内範子・上野由利子

(奈良教育大学附属幼稚園)

堀越紀香

(奈良教育大学 幼年教育教室)

An Effort to evaluate Kindergarten to Create New Contents of Child Care and Education

Makiko YOKOYAMA

(Department of Early Childhood Education, Nara University of Education)

Noriko Takeuchi・Yuriko UENO

(Kindergarten attached to Nara University of Education)

Norika HORIKOSHI

(Department of Early Childhood Education, Nara University of Education)

要旨：激動の時代にあるわが国の幼児教育において、今、保育現場で取り組むべきことは、何であろうか。本報告では、新たな幼児教育の創出に向けて、幼稚園／保育所それぞれが、これまで蓄積してきた保育の成果を捉え直し、提示していくことだと考えた。そこで、幼稚園教育の成果を示すための1つの方法として、保育者が編成した教育課程と研究者が保育観察によって捉えた日々の保育をつきあわせて検討する方法を提案し、3歳児1学期の環境構成と保育者の援助のあり方について分析を試みた。その結果、幼稚園教育の成果として「安心・安定の上に築かれる保育」、「目の前にいる1人ひとりの子どもに応じた保育」、「環境を通した保育」の3点が挙げられ、課題としては「発達の大きな流れの中で、子どもの姿を捉える」ことが指摘された。

キーワード：幼稚園 kindergarten, 保育・幼児教育 early childhood care and education,

3歳児 3-year-old children, 保育者と研究者の協働 collaboration of teachers and researchers

1. 幼児教育の今

1. 1. 「幼保一体化」の動き

現在、日本の幼児教育¹⁾は激動の時代を迎えている。従来の幼稚園、保育所といった2つの機関で行われてきた保育・教育的な営みのあり方が問われ、両者は今、大きな変革を迫られている。

文部科学省、厚生労働省といったその所管の相違を含め、幼保の違いの解消を求める「幼保一元化」の要請はすでに戦前からあり、近年に至るまで、繰り返し議論されてきた(瓜生, 2002参照)。特に90年代後半から両者の垣根を低くする施策が次々と打ち出され、「幼保の隣接化」が進んでいる。

その流れを概観すると、1998(平成10)年には「幼

稚園と保育所の施設の共用化等に関する指針」(教育課程審議会答申)が策定され、施設の共有化が図られた。時を同じくして「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」の1998(平成10)年度の改訂では、双方の関係者が改訂に参加し、教育内容と保育内容の整合性が図られた。また、幼稚園教諭・保育士の資格の併有の促進、合同研修の実施等も進められてきた。このように、施設等、ハード面の連携強化と共に、保育内容といったソフト面の連携、及び保育を支える人的な連携が取り組まれてきたわけである。

その後、2006(平成18)年10月から、幼保を一体化した「認定こども園」制度が本格実施される。しかし、当初2000件を目ざしていた認定件数も、2010(平成22)年4月1日現在、44都道府県532件(文部科学省・

厚生労働省幼保連携推進室調査)に留まっている。なぜ普及が進まないのか、その原因の1つに、施設は「一体化」されても、行政は「二元化」のままといった「二重行政」が挙げられている(認定こども園制度の在り方に関する検討会, 2009)。

1. 2. 「子ども・子育て新システム」

こうした流れを背景に、2010(平成22)年4月に「幼稚園・保育所の一体化」を1つの目玉とする「子ども・子育て新システム」が打ち出された。同年6月に提案された「基本制度案要綱」では、「幼稚園・保育所・認定こども園の垣根を取り払い(保育に欠ける要件の撤廃等)、新たな指針に基づき、幼児教育と保育とともに提供するこども園(仮称)に一体化し、新システムに位置づける」(子ども・子育て新システム検討会議, 2010)とし、新システムを一元的に実施する「子ども家庭省」(仮称)の創設を検討するとしている。この制度は、2011(平成23)年通常国会に法案を提出し、2013(平成25)年度施行を目ざしている。

こうした状況下、2010年9月以降、この制度の作業グループに「基本制度」「幼保一体化」「子ども指針(仮称)」の3つのワーキングチームが立ち上げられ、集中的な議論が開始された。

1. 3. 「子ども園(仮称)」

ワーキングチームの議論の中で、注目を浴びたのが、「幼保一体化」ワーキングチームの「こども園(仮称)」に関してである。今後10年程度の経過期間後に幼稚園と保育所を「こども園(仮称)」に統合する方針が示され(第2回会合, 2010年11月1日)、幼児教育関係者に大きな波紋を呼んだ。

具体的な「こども園(仮称)」制度のあり方は、ワーキングチームで検討を進めるとされ、第3回会合(2010年11月16日)以降、複数案が示され、検討されている。案には、「こども園(仮称)」への一本化だけでなく、従来の幼稚園型、保育所型を残すものも示されており、当初の「幼保廃止」「こども園への一本化」とは異なる、現行に近い制度が描かれつつある。いずれにせよ、早晩、ワーキングチームの議論を通して、新たな幼保一体化の姿が示されるはずである。

1. 4. 問われるべきは「保育内容」

「こども園(仮称)」議論においては、「幼稚園／保育所がなくなるのか?」といったハード面に目が行きがちである。実際、ワーキングチームの議論においても、各メンバーが幼保それぞれの立場から、自らの機関の存続を訴える主張が目立つ。第5回会合(2010年12月20日)では、今一度「幼保一体化の目的」²⁾に立ち返るべきという意見がみられるものの、「誰のための制度改革か?」といった感は免れない(参考: 子

ども・子育て新システム検討会議作業グループ 幼保一体化ワーキングチーム(第5回)資料2)。

保育の主人公は、あくまで子どもである。これを忘れてはならない。先述の「幼保一体化の目的」では、第1に「①世界に誇る質の高い幼児教育・保育を希望する全ての子に」が挙げられている。では、その「質」とは何なのか? 今、問うべきことは、幼稚園／保育所といった機関の形態よりも、今を生き、未来を担う「子ども」にとって、必要な保育の「内容」ではなかるうか。

換言すれば、これまでの幼保の歴史の中で培ってきた何を、未来に伝え、発展させていくべきなのか、ということである。箱を先に作って「さあ、中に何を入れよう?」と考えるのではなく、「入れたいもの」に適った箱を作るべきである。子どもたちが求める保育の内容を捉え、それに適った制度を構築することが、今、必要なのではなかるうか。

2. 保育現場の今

では、誰が、次世代に継承すべき保育内容を明らかにするのか?

国の施策の動きをにらみつつも、それぞれの保育現場では、日々、今、目の前にいる子どもたちの育ちを支えるために、保育が営まれている。次世代のわが国の保育・幼児教育に継承していくべき保育内容を検証するのは、子どもに最も近い所にある保育現場、すなわち幼稚園／保育所等であるべきだと考える。今の子どもの姿を捉え、これまでの保育内容の蓄積を振り返る。そして、これから求められる内容を考える。これらは、保育現場でこそ、可能になる。

2. 1. 今、幼稚園に求められること：幼稚園教育の成果を見つめ直す

こうした問題意識の中、著者らは、これまで培ってきた幼稚園教育の成果と課題を捉えていくことを目的に、日々の保育を見つめ直すことを試みることにした。その際、重視したのは、次の3点である。

第1に、子どもの生活の場、すなわち実際の保育の場での子どもの姿を対象とする。これからの保育のあり方、その内容を探るために、過去の実践をふりかえるのではなく、今、ここに生きる子どもの姿から、保育を捉えることを目指した。具体的には、保育の営みの中核である「環境構成」と「保育者の援助」に焦点をあてる。

第2に、保育の実践者である保育者と幼児教育の研究者が、協働して取り組む。両者の専門性と視点を生かすことで、新たな保育の捉えが生まれることを期待する。具体的には、保育者が編成した教育課程／指導計画と、研究者による実際の保育場面の観察結果を

きあわせ、環境構成と保育者の援助について分析を加える。各園の教育課程は、2008（平成20）年の「幼稚園教育要領」の改訂を受けて、新たに編成されたところである。その検証も含めて、分析の対象とする。

第3に、保育者養成への還元である。これは、教員養成大学としての本学の使命でもある。本学が目ざす幼保を統合する保育力量を備えた保育者養成に向けて、新たな知見を得ることを目指す。

2. 2. 「3歳児保育」への着目

保育を見つめ直す上で、本報告では「3歳児保育」に着目した。幼稚園は、学校教育法に「幼稚園に入園することができる者は、満三歳から、小学校就学の始期に達するまでの幼児とする」（第3章、第26条）とあるように、3歳児から教育の対象とする。

一方、保育所では0歳から保育を積み重ねている。同じ3歳児であっても、家庭から初めて離れて集団生活を送る幼稚園の3歳児と保育所の3歳児では、子どもの姿も求められる保育の内容も大きく異なると考えられる。本来ならば、幼保の3歳児保育の比較を行い、両者の特色を示すのが有効であろう。しかし、本報告では、方法の妥当性を検討することも含め、まず試みとして、「3歳児保育」を対象に、幼稚園教育の特色を明らかにすることを目的とした。

3. 3歳児保育の今

3. 1. 「3歳児保育」の実施状況

幼稚園教育の特色を検討する前に、幼稚園での3歳児保育の実施状況について調べた。先に見たように、幼稚園には満3歳から入園が可能であるが、すべての自治体が3歳児保育を行っているわけではない。

3. 1. 1. 3歳児の幼稚園就園率（全国）

3歳児の幼稚園就園率をみてみよう。Figure 1に、平成17年度の幼児教育の普及状況を都道府県別に示した。全国平均をみると、幼稚園就園率は32.5%、保育所在籍率は43.9%であり、家庭等にいても、保育所に通う子どもが最も多い。

3. 1. 2. 自治体の3歳児保育実施状況（奈良県）

次に、自治体の3歳児保育の実施についてみてみよう。奈良県内12市の自治体のホームページから、幼稚園教育について調べてみた。その結果、3歳児保育を市内公立幼稚園全園で実施しているのは、大和郡山市（11園）・生駒市（9園）・天理市（9園）・宇陀市（5園）・五條市（2園）・御所市（2園）であった。

一方、奈良市（39園）・橿原市（15園）・香芝市（9園）・大和高田市（7園）の4市は3歳児保育は実施していない。また、葛城市（5園中2園で実施）と桜井市（5園中1園で実施）では、一部の幼稚園で3歳児保育を実施していた。

公立幼稚園の実施状況をみだが、私立幼稚園では大半が3歳児保育を実施しており、3歳児保育を実施していない自治体では、3歳児に対する幼稚園教育は、私立幼稚園が担ってきたことになる。

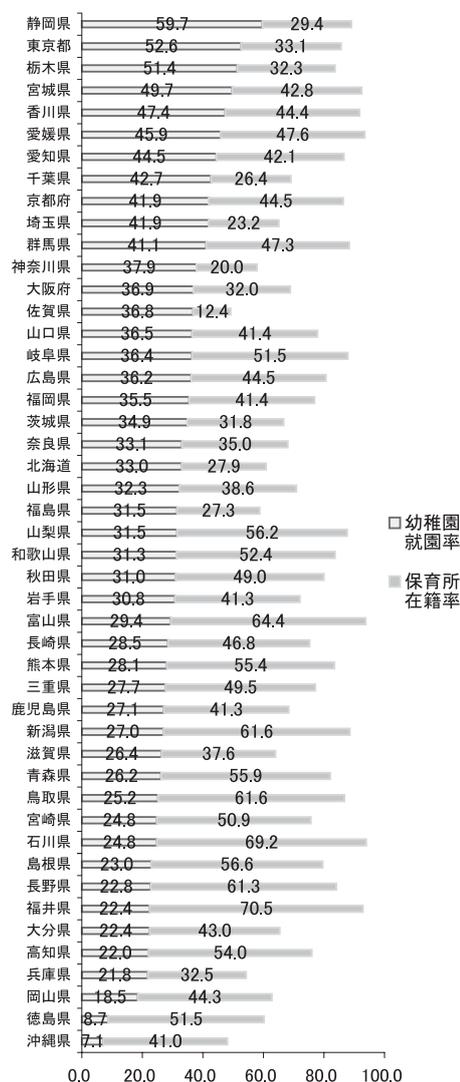


Figure 1 3歳児の幼児教育の普及状況 (%)

(子ども・子育て新システム検討会議作業グループ 幼保一体化ワーキングチーム（第1回会合）2010年10月14日開催、参考資料3、p56の3歳児のグラフをもとに作成)

4. 幼稚園における3歳児保育 ～本学附属幼稚園の実践から～

本節では、幼稚園における3歳児保育について、教育課程・指導計画の読みとりと、実際の保育場面の観察で得られた事例を併せ、考察を加えていく。

4. 1. 教育課程にみる3歳児保育

幼稚園の教育課程においては、各園の「教育目標」に基づき、まず年齢別の「年間目標」を立て、さらに成長の節目となる期間ごとの「期間目標」が設定されることが多い。

4. 1. 1. 教育目標

本学附属幼稚園では、「豊かな自然に囲まれた ころもからだも育つ幼稚園」を教育の特色とし、「生き生きとあそぶ子ども（安定）」「精いっぱいがんばる子ども（充実）」「友達といっしょにのびる子ども（共存）」の3つを教育目標として掲げている。附属幼稚園では、自尊心³⁾の育ちに視点をあてた教育課程が編成されており、教育目標も、自尊心とかかわる「安定」「充実」「共存」の3つの言葉で表されている。

4. 1. 2. 年間目標

教育目標に基づき、3歳児の指導目標がTable 1のように設定されている。

Table 1 3歳児の指導目標（奈良教育大学附属幼稚園）

<p>生き生きとあそぶ子ども</p> <p>初めての集団生活である幼稚園に親しみをもち、元気いっぱい楽しんで園生活を送れるようにしたい。そして、身の回りのいろいろなものとの出会いに興味を示し、自分からそれらにかかわり遊びに熱中して取り組める子どもにしたい。</p>
<p>精いっぱいがんばる子ども</p> <p>まず自分の身のまわりのこと、それから生活のいろいろな側面でそれぞれにもっているその子らしさや、力を存分に発揮できるように励まし、がんばってきた喜びと自信をもたせたい。そして、それを基にして自ら伸びようとする意欲をもった子どもに育てたい。</p>
<p>友達といっしょにのびる子ども</p> <p>友達の存在を知り、友達とのいろいろなかかわりを通してうれしかったこと、悲しかったことなどの様々な経験をさせたい。そのなかで一緒に遊ぶおもしろさや楽しさを感じとらせ「友達、大好き」な子どもに育てたい。</p>

奈良教育大学附属幼稚園 2009 教育課程 p.11より引用。

4. 1. 3. 期間目標

3歳児の1年間はさらに5期に分けられる。子どもの生活する姿から節目を探り、1・2学期をそれぞれを2期に区切り、1年を5期として捉えている。

また、教育目標を達成するために、保育年限である2～3年を見通し、幼児の発達していく姿をもとに各期毎にねらいを設定している。このねらいは、達成目標ではなく、その方向を示すものである。ねらいも、自尊心の育ちの観点から、「安定」「充実」「共存」の3つの柱で構成されている。

Table 2に、3歳児の各期の子どもの特徴的な姿を

「発達の様相」として示したものと、各期の保育の「ねらい」（期間目標）を示す。

Table 1, 2にあるように、本学附属幼稚園の3歳児保育においては、「幼稚園生活に慣れ、安定した生活を送れること」が最も大きなねらいに置かれている。その上で、「自己発揮し、友達とかかわる」ことが目ざされている。

これは、本学の附属幼稚園だけではなく、例えば、京都教育大学附属幼稚園（2010）においても、「園生活に慣れ、安定した生活を送ること」が目標となっている（Table 3参照）。家庭から初めて離れ、園という集団での生活を始める幼稚園の3歳児にとって、「安定」と「園生活に慣れる」ことが共通の目標となることが分かる。

Table 3 3歳児の指導目標（京都教育大学附属幼稚園）

<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園生活に慣れ、安定して遊ぶと共に、友達とも遊ぶことを楽しむ。 ・日常の基本的な生活習慣や、幼稚園生活のリズムを身に付ける。 ・いろいろな遊びを経験して、遊びの楽しさを味わう。
--

京都教育大学附属幼稚園 2010 平成22年度 教育課程 p.2より引用。

4. 2. 内容

教育課程では、各期のねらい（期間目標）を達成させるために、保育者が指導し、実際に子どもに身につけてもらいたいものを「内容」として示している。

本報告では、以下では、幼稚園の3歳児保育の特徴である、「園生活に慣れ、安定した生活を送る」ことが最も大きな目標となる1学期（Ⅰ・Ⅱ期）に特に焦点をあててみていく。Ⅰ・Ⅱ期のねらいと内容をまとめたものが、Table 4（次ページ）である。

Table 4にあるように、Ⅰ期では、まず保育者とかかわりの中で、少しずつ園生活に慣れていくことが目標となる。友達とかかわりは、同年齢の子どもが大勢いる雰囲気慣れ、友達の存在に気付くことから始まる。

Ⅱ期では、保育者の存在を確かめながら、自分の好きな遊びを見つけて遊んだり、身の回りのことも自分でできることは自分でしようと意欲を持ち始める時期

Table 2 3歳児の発達の様相とねらい（奈良教育大学附属幼稚園）

Ⅰ期(4～5月)	Ⅱ期(5～7月)	Ⅲ期(9～10月)	Ⅳ期(10～12月)	Ⅴ期(1～3月)
先生とのふれあいを通して少しずつ園生活に慣れていく時期	幼稚園の楽しさがわかり安定していく時期	園生活に慣れ自分を出せるようになる時期	自分なりにいろいろなことをやってみようとする時期	いろいろなことができるようになることに喜びを感じながら過ごす時期
<ul style="list-style-type: none"> ・先生に親しみをもち、安心して過ごす ・幼稚園の生活に少しずつ慣れる ・先生や友達との出会いを楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園の楽しさを感じ、安心して過ごす ・幼稚園での生活の仕方に慣れる ・先生や友達とのふれあいを喜ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・安心して自分のしたい遊びをみつけて楽しむ ・自分でできることを自分でしようとする ・友達と一緒にいることを楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> ・安定した気持ちで、自分なりにいろいろなことを楽しむ ・自分の身の回りに目を向け、自分で行動しようとする ・友達と親しみ合い、一緒に遊ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びや生活の中で自分らしさを発揮する ・自分でできることが増えていくことを喜び、いろいろなことにがんばって取り組もうとする ・友達とかかわりながら楽しんで遊ぶ

奈良教育大学附属幼稚園 2009 教育課程 p.12より引用。

である。友達にも関心をもち、一緒に遊ぶことが目標となる。保育者の存在を拠り所にし、園生活に慣れるにつれ、生活や遊び、友達とのかかわりを広げ始める時期といえる。

Table 4 3歳児のねらいと内容（Ⅰ・Ⅱ期）
（奈良教育大学附属幼稚園）

	Ⅰ期(4～5月)	Ⅱ期(5～7月)
発達の様相	先生とのふれあいを通して少しずつ園生活に慣れていく時期	幼稚園の楽しさがわかり安定していく時期
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 先生に親しみをもち、安心して過ごす 幼稚園の生活に少しずつ慣れる 先生や友達との出会いを楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> 幼稚園の楽しさを感じ、安心して過ごす 幼稚園での生活の仕方に慣れる 先生や友達とのふれあいを喜ぶ
内容	<ul style="list-style-type: none"> 先生に親しみ、一緒に遊ぶ。 先生と一緒に身の回りの始末をする。 用便、手洗いなど、園での生活の仕方に慣れる。 先生や友達と一緒におやつを食べることを楽しむ。 大勢の子どもがいる雰囲気慣れる。 友達がいることに気付く。 園での生活の流れや、簡単な決まりを知る。 いろいろな遊具や用具があることに気付き、触れて遊ぶ。 先生の話しに親しみをもって聞こうとする。 絵本や人形などによる話を楽しく聞いて、応答したりする。 歌を歌ったり、簡単な手遊びをしたりすることを楽しむ。 いろいろな感情や気持ちをそのまま表す。 	<ul style="list-style-type: none"> 戸外ならではの遊びを楽しむ、開放感を味わう。 簡単な身の回りのことを自分でしようとする。 自分の好きな遊びを喜ぶ。 先生や友達と一緒に弁当を食べることを楽しむ。 先生や友達と一緒にいろいろな遊びをする。 友達に関心をもつ。 身近な草花や小動物を見たり、触れたりして遊ぶ。 水や土、砂などに触れて遊ぶ心地よさを十分に味わう。 いろいろな遊具や用具に関心をもち、自分で使ってみようとする。 先生の話を喜んで聞く。 したいこと、してほしいことを動作や言葉で伝えようとする。 生活のいろいろな場面やあいさつや言葉があることに気付く。 身近な素材に親しみ、触れて遊ぶ。 好きなものになって喜んで遊ぶ。 歌を歌ったり、体を動かしたりすることを楽しむ。

奈良教育大学附属幼稚園 2009 教育課程 p.13より引用。

4. 3. 環境構成と保育者の援助

教育課程に基づく指導計画では、ねらいと内容を達成するために、各期に必要なと考えられる「環境構成」と「保育者の援助」のポイントが具体的に記されている。Table 5（次ページ）に、期毎の「環境構成」と「保育者の援助」を抜粋してまとめた。いずれも、園の3つの教育目標、「生き生きとあそぶ子ども（安定）」「精いっぱいがんばる子ども（充実）」「友達といっしょにのびる子ども（共存）」に対応した項目が立てられている。以下、3つの項目に沿って見ていく。

4. 3. 1. 環境構成

(1) 安心して過ごす（安定）

Ⅰ、Ⅱ期とも、子どもたちにとって園が「安心」できる場所となるように、まず「保育室」を居心地のよい場所にすることが目ざされる。その際、「家庭でなじんでいるもの」を用意するなど、家庭生活との連続性が重視される。

(2) 園に慣れる（充実）

Ⅰ期ではまず「1人ひとり」への配慮が重視される。自他の区別をしやすいようにマーク表示をしたり、遊びの中で満足感が得られるような遊具が用意され

る。Ⅱ期では、Ⅰ期とは異なる新しい生活の流れ（弁当・水遊び）に慣れるような配慮が行われる。

(3) 先生・友達とのふれあい（共存）

Ⅰ期で個別配慮を十分した上で、Ⅱ期では徐々に芽生える友達への関心を支え、保育者や友達とのかかわりを楽しむことができる遊具などが用意される。

4. 3. 2. 保育者の援助

(1) 安心して過ごす（安定）

Ⅰ、Ⅱ期とも共通して、「ありのままの子どもの姿」を認めながら、1人ひとりとじっくりかかわることが目ざされる。泣いたり、登園をしぶったりという、マイナスの感情表出も受け止め、まずは自己をそのまま表出できるような保育者のかかわりが求められる。

(2) 園に慣れる（充実）

Ⅰ期では、気持ちの安定を基盤に、園での基本的な生活習慣に気付かせることから始める。Ⅱ期になると、そうした生活習慣を、自分なりに意欲をもって取り組むことが期待される。楽しい雰囲気をつくりながら、意欲を認める援助が目ざされる。

(3) 先生・友達とのふれあい（共存）

Ⅰ、Ⅱ期とも、居場所を明確にしたり、一対一の対応を重視するなど、保育者の存在を物理的にも、心理的にも強調する援助がなされる。また、保育者とともに、友達の存在にも気づくような援助が目ざされる。保育者や友達の存在を認識する方法として、いずれも「名前」を呼ぶことが挙げられている。

4. 4. 観察から捉えた「3歳児保育」の実態

第一筆者が、附属幼稚園で行った観察の結果を、「環境構成」と「保育者の援助」に着目して提示し、考察を加えていく。

4. 4. 1. 観察方法

本学附属幼稚園の3歳児クラス23名（男児11名・女児12名）と担任保育者を対象に、2010年4月～7月の期間中、週1回（水曜日）、登園から降園時までの観察を計13回行った。記録は、フィールド・ノートに記録すると共に、写真撮影、及びクラス集団での活動についてはビデオ・カメラで撮影した。

4. 4. 2. 結果と考察

(1) 環境構成

室内環境をFigure 2（次ページ）に示した。

●家庭と園生活の連続性 家庭でよく遊んでいると思われるおもちゃが、目につきやすい場所に置かれている。ままごとコーナーには、プラスチック製のままごとセット（食器・炊飯器・調理道具・食材など）やキティちゃんのキッチンの流し台がある。ぬいぐるみは、箱やレターラック状の吊り下げ袋に入れられていたり、数多くある。機関車トーマスのプラレールもかごに入っている。乳母車とベビーカーも2台並んでいる。これらのおもちゃは、男女を問わず、人気があり、ほ

Table 5 環境構成と保育者の援助（Ⅰ・Ⅱ期）（奈良教育大学附属幼稚園）

Ⅰ期(4~7月)	Ⅱ期(5~7月)
(1)環境構成	
<p>●安心して過ごすために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育室は、居心地のよい場所となるように、畳・カーペットを敷き、温かい雰囲気をつくる。おもちゃは、家庭でもなじんでいると思われるものを置く。 ・小動物や生き物に触れる機会を多くし、緊張のとれない子どもの気持ちをほぐすようにする。 ・戸外で遊ぶ時間をもち、緊張感を和らげ、解放できるようにする。 ・一日の生活の流れは、園の生活リズムに慣れるように、毎日ほぼ同じようにする。 ・床にマークをはり、居場所をつくる。 <p>●園生活に慣れるために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分とみんなのものの区別ができるように、それぞれの子どものマークを決める。 ・遊具は、家庭で親しんでいるもの、興味をひきやすいもの、遊びにこりつきやすいものを選び、1人ひとりが満足して遊べるように多めに用意する。 ・遊具は、子どもの目につきやすく、出し入れしやすい場所に、具体的な絵表示などをつけて配置する。 	<p>●幼稚園での楽しさを感じ安心して過ごすために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭でも楽しんでいるような歌のカセットや動物タンバリンなど、なじみやすい楽器を用意し、保育室が楽しい雰囲気になるようにする。 ・砂や土、水を使った遊びをする中で、開放的な気持ちを味わえるようにする。 ・保育室の外にも目を向け、身近な自然に触れる機会を多くする。 <p>●幼稚園での生活の仕方に慣れるために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お弁当が始まると疲れることが予想されるため、休憩の時間や場を作り、無理なく過ごせるようにする。 ・水遊び時には、衣服の着脱や整理をしやすいように脱衣かごやバッグをかけるフックを準備する。 <p>●先生や友達とのふれあいを楽しめるように</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達への関心が芽生えてくる頃なので、友達と一緒に遊ぶと楽しい遊具や用具を用意する。 ・それぞれのイメージで自分なりに遊ぶようになってくるので、友達と同じつもりになって遊べるように、動物のお面などを用意する。
(2)保育者の援助	
<p>●安心して過ごすために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あたたかな雰囲気でにこやかに子どもたちを受け入れる。 ・抱っこなどのスキンシップをしたり、1人ひとりの子どもにできるだけ多く言葉をかける。 ・泣いたり、起こったりなど感情の表出も、ありのままの姿を受け止める。 <p>●園生活に慣れるために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・登園は、門で保護者と別れることを原則としているが、不安な子どもは保護者に保育室までついて来てもらい、親子で納得してから別れるようにする。 ・基本的な生活習慣：上靴、下靴の区別、用便への配慮。 園生活の流れやきまりは毎日の繰り返しの中で気付かせる。 身辺自立は個人差が大きいことに留意する。 <p>●先生や友達との出会いを楽しむために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先生の名前をみんなで呼ぶなど、保育者の存在を強調する。 ・ぬいぐるみやペープサートなどを媒介に話しかけ、保育者に親しみをもたせる。 ・降園前に1人ひとりに言葉をかけながら、出席ノートにシールをはり、子どもと一対一のかかわりをもつ。 ・保育者が友達の名前を呼ぶことで、友達に気付くようにする。 ・歌を歌ったり、おやつを食べる時間など、柔らかな雰囲気の中でたくさん子どもと一緒に過ごす心地よさを感じられるようにする。 	<p>●幼稚園での楽しさを感じ安心して過ごすために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園に慣れてくる反面、疲れが出たり登園をしる子どもも出てくるので、1人ひとりとじっくりとかかわる。 ・子どもの感情表出を受け入れ、ありのままの自分を自然に出せるようにする。 <p>●幼稚園での生活の仕方に慣れるために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・衣服の着脱や持ち物の始末、用便などの身の回りのことを自分なりにやってみようとする意欲を認める。 ・順番に待つということが理解できない子どもが多いので、具体的な場面を捉えてその必要性を伝えていく。 ・片付けは、楽しい雰囲気をつくり、保育者と一緒に喜んで片づけられるようにする。 ・遊具は、家庭で親しんでいるもの、興味をひきやすいもの、遊びにこりつきやすいものを選び、1人ひとりが満足して遊べるように多めに用意する。 <p>●先生や友達とのふれあいを楽しめるように</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもが保育者を必要としたときに応えられるように、保育者はできるだけ子どもの視界に入る場所にいるようにする。 ・意図的に子どもの名前を呼ぶ機会を多くし、お互いの名前に気付かせるようにする。 ・友達に目が向くようになると、物の取り合いなども多くなるが、まず自分の思いを出す心地よさを感じられるようにする。 ・「おはよう」「さようなら」のあいさつを保育者が繰り返すことで、自分からも言ってみようという気持ちになるようにする。 ・友達のお輪の中に入りにくい子どもには、友達が楽しそうに遊ぶ姿を一緒に見たり、その様子を伝え、自分からやってみようという気持ちが起こるのを待つ。

奈良教育大学附属幼稚園 2009 教育課程 pp.17-22 より作成。

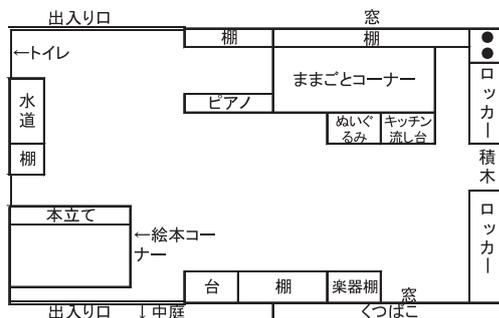


Figure 2 3歳児の保育室

は毎日、いずれかの子どもが手にして遊んでいた。

また、園内の他の場所では、キャラクターのついでにいるおもちゃ等は、ほとんど見かけない。キティちゃんやトーマスといったキャラクターの遊具があるのは、家庭との連続性を意識した3歳児の保育室ならで

はである。

保育室の入り口には、表紙を見せて並べる絵本棚と楕円形のテーブル、子ども用長いすが置かれ、絵本コーナーが設置されている。本箱の上段には、家庭で読まれることが多い『ノンタンシリーズ』（キヨノサチコ、偕成社）や『パオちゃんシリーズ』（仲川道子、PHP研究所）の絵本が並べられている。

●居場所の確保 個人のくつばこ、ロッカーには子ども1人ひとりのマークが貼られ、自分の場所が一目で分かるようになっている。床にはコの字型にビニールテープが貼られ、テープの上にもマークが貼ってある。このマークは、クラスで集まる時の1人ひとりの子どもの居場所を示している。

絵本コーナーの壁面には、「おめでとう ももぐみのおたんじょうび」の文字と月ごとに卵が1個ずつ貼られている。卵の下には、その月に誕生日を迎える子

どもの名前とシール、誕生日の日付がかかれた札が貼られている（5/12～）。誕生日を迎えるとその子のマークが貼られたひよこが、卵から出てくる。

自分のマークのシールが貼ってあることで、身の回りの始末がしやすくなる。と同時に、自分の場所が保育室にあることが明示され、居場所が確保される。

●**園生活に慣れる・楽しむ** 5月の連休前までは、クラスの子どもを2つのグループに分け、隔日登園とする。バスで通園する子どももあり、遠距離の連日登園は子どもにとって負担であること、一度にではなく、徐々に大人数の子どもの集団に慣れていくことがねらいである。

読みかかせを楽しんだ絵本『パオちゃんシリーズ』の登場人物の紙人形を、保育室内の随所に一部が見えるようにして隠す。登園してきた子どもたちは「パオちゃん見つけた!」とかくれんぼのように、人形を探し、見つけて喜ぶ（5/26・6/2・6/9）。

5月の連休明け、クマのビニール製の子どもの大きさの起き上がりこぼしの人形が出入りに置かれている（5/6・5/12）。登園してきた子どもの中には、人形に抱きついたり、パンチやキックをする子もいる。

なじみのあるもの、目新しいもの、それぞれが子どもたちにとって異なる魅力をもち、園での生活を楽しみ、期待させるものになっている。

●**思いや意欲を満たす** 多様な種類のおもちゃが保育室内外に用意されていた。また、布製の動物のお面や「ももちゃんマン」マント（5/12～）、ぬいぐるみなどは、数多く揃えられており、「遊びたい」という子どもの思いや意欲が満たされるようになっていた。

動物タンバリン等、楽器やプラレールなどのおもちゃは、棚やかごごと、場所を移動させることが可能であり、遊びたい場所に持っていくことができる。

新しい環境の中で、「やってみよう」という思いや意欲が十分満たされるように、おもちゃの種類や数、遊びの場所が設定されていた。

（2）保育者の援助

●**個別対応の重視** 毎朝、登園してきた子どもを、くつばこ前に座って出迎え、1人ひとり抱きしめたり、抱っこする。子どもの声に耳を傾け、言葉を交わす。

母親から離れられない子どもは、無理に離すことはしない。また母親が帰り、不安定になった子どもは、保育者が抱っこしたり、手をつないで過ごすなど、その子に応じた対応をとる。

おやつを配ったり、降園前に出席ノートにシールを貼るときは、コの字型に座った子どもたちの所に、保育者が行き、1人ひとり順番に名前をよび、顔を見ながら声をかける。

幼稚園は集団生活の場であるが、入園直後の子どもたちと保育者が信頼関係を築くために、丁寧に個別なかかわりがなされていた。スキンシップが重視され、

特に1日の始まりと終わりには、1対1の関係を結ぶ機会が設けられていた。

●**他者の存在の意識化** おやつやシール貼りのときなど、子どもが全員そろっているときに、1人ひとりの名前をみんなに聞こえるように、はっきりと呼びながら配ったり、少人数の遊びの輪の中にいる時も、その場にいる他の子どもに共有できるように、子どもの名前を呼ぶ姿が見られた。

名前を呼ぶことが、本人に対する呼びかけだけではなく、周囲にいる子どもに、その子どもを意識させるよい機会となっていた。

●**基本的な生活習慣の確立** 排泄の自立ができていない子どもが複数いることもあり、生活の流れの中でクラス全体に向けてトイレに行くことを促すだけではなく、個別に声かけを行っていた。補助の保育者と連携しながら、個別の援助が重視されていた。

登園後の身支度については、支度をしないで遊び始める子どもには「スモック脱いでから遊ぼうね」など、毎回、はっきりと伝えていた。支度が早くできた子には、「○○ちゃん、早くできて、すごいね」と認め、ほめる声かけを、周囲にも聞こえるように行っていた。

生活習慣の定着のための援助は、毎日の具体的な機会を捉えて、個別に丁寧に行っていた。

4. 4. 3. 総合的考察

教育課程・指導計画、及び観察結果のいずれからでも、3歳児1学期の保育の特徴として、家庭生活とつながりながら、新しい環境である園での生活に子どもの気持ちが向き、安心して過ごせるように、居場所の確保など、環境構成に工夫を重ねていること、1人ひとりの子どもに個別に対応する中で、保育者が園での拠り所となるように、信頼関係を築く援助を大切にしていることが見てとれた。

「3歳」という同じ年齢ではあっても、生まれ月やそれまでの家庭での生活経験などによって、1人ひとりの子どもの育ちは大きく異なる。それゆえ、環境構成では、多様性、数、活動場所などを保障し、保育者の援助では個別対応を重視するなど、いずれもゆるやかで、幅をもった対応がなされていた。「3歳」という年齢の発達過程は踏まえつつも、目の前の子どもの育ちに応じた援助が、展開されていた。

5. 幼稚園教育の成果を問う

～3歳児1学期の保育内容の分析から～

本報告の目的は、幼稚園の教育課程、及び指導計画と保育観察の結果の分析から、幼稚園教育の成果と課題について考察を加えることである。本報告では、3歳児1学期の保育内容を対象に、保育者と研究者の2つの眼から幼稚園教育の成果と課題を検討してきた。

5. 1. 幼稚園教育の成果

まず、幼稚園教育の成果として、以下の3点を指摘したい。

・安心・安定の上に築かれる保育

「保育所は養護、幼稚園は教育」と捉えられることがある。しかし、本報告で見てきたように、幼稚園においても、保育の基本は「安心・安定」であり、園生活を安心して過ごせることが重視されていた。

・目の前にいる1人ひとりの子どもに応じた保育

「3歳」といった年齢の発達特徴からではなく、目の前にあるその子どもの姿から、環境が構成され、保育が展開されていた。また、多様な子どもたちに対応できるよう、ゆるやかで幅のある環境構成や個別対応が重視されていた。

・環境を通した保育

幼児教育の基本は、まさしく「環境を通した教育」である。本報告で見てきた、環境構成のきめ細やかさは、この基本を具現化するものであろう。

5. 2. 幼稚園教育の課題

次に幼稚園教育の課題として、次の点を指摘したい。

・発達の大きな流れの中で、子どもの姿を捉える：3歳以前の発達をふまえる

先の成果で挙げた「目の前にいる1人ひとりの子どもに応じた保育」は、逆の見方をすれば、子どもの姿を発達の流れの中において捉えることの弱さにもつながる。

本報告の幼稚園3歳児1学期の分析でみられた子どもの姿は、その「発達過程」にある姿というよりも、家庭から幼稚園への「環境移行」に焦点づけられた姿といえる。例えば、新奇な環境だから自己を表出しにくいということは分かるが、発達的に見て自己の表出が難しい時期なのかどうかは、捉えがたい。

また、入園前の3歳以前の子どもの発達の姿を保育内容の分析から見とることも難しい。発達理解よりも「家庭と園生活の連続性」といった、生活体験理解に比重が置かれているようにも見える。いわば、3歳以前の子どもの発達の姿は、家庭での生活の中に押し込まれている感がある。

もっとも「幼稚園教育要領」(2008)においても、「第2章 ねらい及び内容」で示されているのは、幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎である。そこには、子どもの発達過程の記述はない。一方、「保育所保育指針」(2008)では、「第3章 保育の内容」の前に「第2章 子どもの発達」が置かれ、「乳幼児期の発達の特徴」を述べた上で、大まかな発達の流れを「発達過程」として記している。1人ひとりの子どもの育ちの姿を重視しつつも、その前提として、発達の順序性や連続性を踏まえることが求められているのである。

「3歳児」からではなく、「誕生」から子どもの育ちを捉える。そうすることで「最年少の幼い3歳児」ではなく、「発達してきた3歳児」として子どもを捉えることができる。誕生後、赤ちゃんは劇的に人として発達していく。その姿を捉えることは、子ども自らもつ発達する力を認めることにつながる。

同様に「幼稚園修了」までではなく、「育ちゆく子ども」として、小学校以降の発達過程も把握する。「切り取られた」3年間ではなく、子どもの発達の「流れの中にある」3年間として、子どもの姿を捉えたい。

このように子どもが自ら発達していく力を認め、長期的視野を持って支援にあたることは、より子どもの発達の可能性を広げることにつながると考える。

6. 新たな幼児教育の創出に向けて

6. 1. 成果と課題

幼稚園1園、しかも1学年1学期の保育分析からではあるが、本報告では保育実践の具体から、幼稚園教育の成果を問おうと試みた。幼稚園教育は、地域の子どもの実情に応じて展開され、その内容は独自性が強い。このことを考えれば、幼稚園教育全体の成果を問うためには、まず個々の園での実践の成果を集約することが必要だと考える。ここに、本報告の価値がある。

しかし本報告では、保育所保育との直接の比較なく、論を進めてきた。保育所保育においても、何を成果として、次世代の新たな幼児教育に継承していくのか、実践の見つめ直しが求められる。この点が今後の課題である。

今、そして未来を生きる子どもたちが求める、幼保の保育の成果を統合した新たな保育の創出を願う。

6. 2. 保育者養成に向けての示唆

最後に、保育者養成への示唆として、保育を実践する力とともに、「保育を見とる力」の育成を指摘したい。「保育を見とる力」とは、子どもの姿だけではなく、環境構成、保育者の援助を捉える力も含む。本報告では、教育課程と観察から見とった保育実践から分析を行ったが、保育を見とることによって、他者の保育や自らの保育のふりかえりから学ぶことが可能になる。自己教育力の1つとしてその育成を旨じたい。

注

1) 幼児教育

就学前教育に関しては「幼児教育」と「保育」という表現がある。「教育」と「保育」の定義に関しては、これまできちんと議論されてこなかった。今、まさに「子ども・子育て新システム検討会議作業グループ 幼保指針(仮称)ワーキングチーム」(第3回会合

2010年12月13日)において議論されているところである。本報告では、無藤(2009)にならい、保育所と幼稚園の両方で行われる営み両方をさして「幼児教育」と表現する。「保育」においては、保育所も幼稚園も含む「保育活動」という意味で用いている。

2) 幼保一体化の目的

「幼保一体化の目的について(案)」(幼保一体化ワーキングチーム第5回 参考資料2)では、次の3つの目的が挙げられている。①世界に誇る質の高い幼児教育・保育を希望する全ての子に ②支援を必要とする全ての親子が全ての地域であれゆる施設において支援を受けられるように ③男女ともがともにあらゆる場面で活躍できる社会を目指し、女性の就労率向上や多様なニーズに対応する保育の量的拡大を図るために

3) 自尊心

かけがえのない自分を大切に思う心。自分の弱いところやいやなところも含めて、自分を丸ごと肯定する気持ちであり、自分の存在そのものを価値ある者と認める心。そしてその心は人のことも同じように大切に思う気持ちにつながる。

引用文献

- 「保育所保育指針」改訂に関する検討会 2008 保育所保育指針解説書 ひかりのくに
京都教育大学附属幼稚園 2010 平成22年度 教育課程 3年保育
子ども・子育て新システム検討会議 2010 子ども・子育て新システムの基本制度要綱(2010年6月25日)
子ども・子育て新システム検討会議作業グループ幼保一体化ワーキングチーム 第1回会合資料 2010
【参考3】基礎資料 幼児教育・保育を巡る現状等(データ編) p.56(平成22年10月14日開催)(http://www.8.cao.go.jp/shoushi/10motto/08kosodate/wg/kihon/k_2/pdf/ref6-9.pdf)
子ども・子育て新システム検討会議作業グループ幼保一体化ワーキングチーム 第5回会合資料 2010
【資料2】各委員提出資料(平成22年12月20日開催)(http://www.8.cao.go.jp/shoushi/10motto/08kosodate/wg/youho/k_5/pdf/s2-1.pdf~s2-3.pdf)
厚生労働省 2008 保育所保育指針
文部科学省 2008 幼稚園教育要領
無藤 隆 2009 幼児教育の原則：保育内容を徹底的に考える ミネルヴァ書房
奈良教育大学附属幼稚園 2009 教育課程
認定こども園制度の在り方に関する検討会 2009 今後の認定こども園制度の在り方について(2009年3月31日)(<http://www.8.cao.go.jp/shoushi/10motto/06kodomoen/pdf/sh-2.pdf>)

- 瓜生淑子 2002 幼稚園と保育園の“近接化”をどうみるか 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 11, 155-160.

参考URL

- 内閣府政策統括官(共生社会政策担当) 少子化対策子ども・子育て新システム検討会議
<http://www.8.cao.go.jp/shoushi/10motto/08kosodate/index.html>